

## R. Browning の初期の作品について

小 林 裕 子

ロマン派の詩人は、自己のささやきを、‘interior monologue’といふ形で表現することによって、人間の赤裸な心情をうたひ上げた。この詩人の心を受継いだ Browning (1812—1889) は、彼の作品を、或新しい構想のもとに創出した。それは、‘dramatic monologue’といふ表現形式である。

主観性と客観性との調和を意図して生み出されたものが、この dramatic monologue であるとすれば、これからとり上げようとする初期の長詩 *Pauline* (1832), *Paracelsus* (1835), *Sordello* (1840)——は、何れも、その調和へと向ふ試作であるとも考へられる。あくまでも、彼の詩の展開過程の予備的な考察として、これらの詩を見てゆかうと思ふのである。

長い間世に認められなかったこれらの作品について、Browning は、何度か改訂を試みてゐる。しかし、初版から最終版 (1888) に至るまでの長い期間に、何ら本質的な思想の変化は認められない様である。それは、次の事実によつても分る。即ち、“There are no changes of importance in any of the poems—merely verbal corrections,”<sup>1</sup> と彼自身が云つてゐる。*Sordello* についても、全体にわたって改正されたとは云ふものの、各頁の上欄に説明的な文句を附加したまでのことである。

最後の改訂の前に (Jan. 24, 1888) Mrs. Charles Skirrow に宛てた書翰の中にも、“with no alterations except of the most trifling nature”と書いてゐるし、出版に際して (Feb. 27, '88) Mr. Smith<sup>2</sup> にも同様な事

1 Letter to Moncure Daniel Conway, Sept. 17, 1863.

2 *The Poetical Works of Robert Browning*, 16 vols. (1888) の publisher. これは月々に一巻づつ出版されることになってゐた。従つて、全巻が揃つたのは翌年である。本小論での引用は、この版によつた。

実を述べてゐる。しかし、最初の作品 *Pauline* だけは、相当大巾に改訂してあるし、1868 年の改訂版までは含まれてゐなかった。にも拘らず、彼はかう云つてゐる。「五十年余も手をつけずに置いたあの不運な *Pauline* を読んで、急に改訂を思ひたつた。最初からの考へはそのままにして、明かな欠陥——表現とか詩型とか構成——だけを訂正することにする。」

改訂の度毎に附けてゐる序によつても分るが、彼自身、*Pauline* を決して好ましいものとは思つてゐなかつた。Isabella Blagden に宛てた手紙 (Aug. 19 '65) の中で、彼は自分の詩に対する風評を非常に氣にしてゐる。批評には注意して耳を傾けるが、様々な意見や非難をもつてゐる人々が少数は確かに居るのに、誰一人として助言や忠告をしてくれないのを嘆いてゐる。しかし、さういった因襲を破つて、別の新しい目でものを見る若い人々が出て、彼の詩に新分野を開拓してくれた。このことについて、彼は多大の期待をもつのである。つねにかうして、彼は自分の作品に対して、謙虚な態度を示してゐるのであるが、その手紙を彼は、次の様に結んでゐる。

As I began, as I shall end, taking my own course, pleasing myself or aiming at doing so, and thereby, I hope, pleasing God. As I never did otherwise, I never had any fear as to what I did going ultimately to the bad,—hence in collected editions I always reprinted everything, smallest and greatest.

以上のことばからも察せられる様に、彼は或一つの信念を守りながら詩作を続けてゐた。そして、より適切な表現を試みようとし、言葉そのものにも細心の注意をはらつてゐたことは確かである。

*Men and Women* (1855) が出版され、その批評をした John Ruskin の非難に應へて、詩といふものの有り方及び受けとり方を攻撃したことは有名である。その中で彼が云つてゐるのは、自分自身の言葉で自分の意見を創出してゐない事は充分承知してゐるが、すべて詩といふものは、限られた内に無限の感情を委ねるのであるといふ事。そして、“Don't let me lose my lord by any seeming self-sufficiency or petulance. . . . I shall never change my point of sight, or feel other than disconcerted and apprehensive when the public, critic and all, begin to understand and approve me.” と言明してゐる。これが彼の人間として、詩人としての良

心である。Pauline 改訂に当って彼の処した態度が、詩人として如何に良心的であったかは、Mrs. Orr も認めてゐる通りである。<sup>1</sup>

この様にして、詩人の生涯を通じていくたびか筆の加へられた、いはゆる初期の失敗作に、彼の意図したものが初めから終りまで、変ることなく受継がれてきたとすると、これらの作品をとり上げて、彼の詩の展開過程を追究してみる事に、ある意義を感じるのである。第一期の Browning は即ち第二期の彼であり、ただ、より具体化された形をとってゐるに過ぎない、<sup>2</sup> と断言することは出来ない。が、とに角、これらの作品が interior monologue から dramatic monologue への過程を予想させる、ある試みであるとは云へると思ふ。そして、詩人の思想の展開をみる上にも、自叙傳的色彩を多分に含んでゐるこれらの作品をみてゆくことは、以後の詩の解釈の上に、何らかの手がかりとならう。

若い詩人 Browning は、当時 Shelley に傾倒し、彼の自由、平等、そして人間の完全性についての、革新的な信念の叫びに喚び覚めされたのであった。「あたかも眞実の光が、すばらしい夢から目覚ませた様に」、<sup>3</sup> 彼は政治的、社会的な抽象の世界から眞実の生命へと向ってゆくのである。しかし、Shelley によって鼓舞された彼の心は、いつまでもただそこにのみ留まるものではなかった。Shelley にとっては、この世に於ける人間生命の限界、有限なる生が‘stains’として感知されてゐたのに対し、Browning にあっては、それが新生命へと変態してゆく一つの大きな素材となつたのである。彼は Shelley 論の中で、薄命の詩人 Shelley が受けた経験が、この天才の心を不信の念へと導いたこと、また、彼の道徳性についてうける誤解に対し、深い同情と理解を以て、弁明をなしてゐる。

1851 年 Paris で書かれた Shelley 論は、若くしてこの世を去つたこの詩人の書翰が、Edward Moxon から次の年に出版されるに当って、その introductory essay として載せられたものである。同時に、Browning の

1 cf. *Life and letters of Robert Browning* (1908), pp. 379~381.

2 Mrs. Orr: *A Handbook to the Works of Robert Browning*, p. 15.

3 Edward Dowden: *Robert Browning*, p. 21.

詩論として知られてゐるものでもある。

彼は詩人の態度を objective と subjective とに分けて、前者を、「劇的宇宙の現象、或は人間の心や頭の行動にあらはれた働き、外側の事物を再現させようと努める詩人」、それを fashioner と呼んでゐる。これに対し、seer と称される subjective poet とは、人間が見るのではなく、神の見るもの——Plato のいふイデア、即ち ‘the Divine Hand’ の上に燃えさかる創造の木の実、それに向つて努力する詩人である。行動の中にある人間性の結合ではなく、‘the primal elements of humanity’ による人間性の結合を目指す。彼が受とり、語らうと希ふ直感に従ひ、‘absolute Mind’ の最も近い反映として、彼自身の魂の中に、人間性の primal elements を探らうとするのである。

これら二つの傾向は、彼らの道徳的動機に見られるといふより、むしろ、技巧上の効果の中に描かれるといふ。勿論、彼は両者を共に容認してゐるのである。そして、seer について、個々の人間の自我、或は社会の要求に対する形成から生じたといふよりは、むしろ詩的衝動への、より高次の方向へと態度を確定させようとしてゐる。即ち、彼は individual ego を重視して、society を次にもっていったのではない。両方共を重視する余り、その板挟みとなりながらも、それらを調和させ、融合させる原動力として、poetic impulse を考へてゐるのである。

この seer の態度が、初期の Browning を力強くあらはしてゐることは明かである。しかし、これから見てゆかうとする作品に於て、必ずしも、明確な輪廓をもって描かれてゐるとは云へないかもしれないが、すでに、未來を約束する詩人の態度がうかがはれるのである。

*Pauline* とは、この詩の subject ではなく、object である。即ち、Pauline といふ架空の人物に対して語られ、うたひ上げられた一詩人 (Norman-French poet, Clément Marot, 1497—1544) の愛の告白の断片的記録といふことになってゐる。従つて、この詩には形の上の一貫性はない。折にふれては高潮する彼の感情のほとばしり——或時には self-centred された自

己の魂、又時には Pauline への愛情の表示——そして、それらの背後には Shelley といふ、彼にとって英雄の如くにうつる偉大な姿をたたへてゐるのである。しかし、この詩を通して感じられることは、その時々感情なり、冥想なりが、或一本の細い糸によって、結ばれてゐるといふことである。それは、人間の赤裸な魂へとつながる。この詩は精神的人間存在の変遷を述べてゐるのである。従つて、‘chambers of thought’ が、この詩の背景となつてゐる。

極度に理想化された社会を夢みてゐた若い詩人は、次第に自己を自覚し、病的なまでに self-conscious に陥る。「これほど烈しく、緊張した、病的な自己意識にとらはれた人が常人の間に見られようか。」と、当時の一批評家がもらした言葉は余りにも知られてゐる。

とに角、この詩が、人間の naked soul を極みまで追究したこと、即ち ‘digs where he stands’ であることは確かである。その点では、subjective poet であることに異論はない。しかし、Pauline に於て、彼が naked soul を何故中心にとり上げたか、否、さうすることを余儀なくされたかに、問題があると思ふ。

I strip my mind bare—whose first elements  
I shall unveil— (ll. 260—61)

といふことばの中には、單に自己をすっかりぬぎ捨てることが、人間性を究める第一段階となるからであらうか。社会人としての自覚によって、宇宙的存在としての人間への強い確信を得、その中の一人としての個人の使命を深く考へる詩人にとって、先づ自己の超越した魂について、考へざるを得なかつたのである。

Oh Pauline, I am ruined who believed  
That though my soul had floated from its sphere  
Of wild<sup>1</sup> dominion into dim orb  
Of self—that it was strong and free as ever! (ll. 89—92)

個人の自覚から發して、人類といふ觀念を生み出さうとする詩人に対

1 初版では wide. 他、punctuation の改められた箇所は可成ある。

し、Browning は、宇宙的存在としての人類の自覚から、その中に含まれる人間の魂へと入ってゆくのである。従って、きはめて個人的な人間の心の活動の記録であると同時に、普遍的な人間の魂の記録でもある。

告白的な自叙傳について、Spender は次の様に説明してゐる。

confessional autobiography may be the record of a transformation of errors by values; or it may be a search for values, or even an attempt to justify the writer by an appeal to the lack of them.<sup>1</sup>

つまり、人間存在の価値を見出すことによって、誤り又は過ちを、変形させてゆかうとする。このことは Browning の初期の作品にも適合し得る。即ち、‘values’ を人間のこの世に於ける限界とみなし、それに附随して生じ、又、生來存在する人間の缺陷、それらを変形させようとする努力、とも考へられる。Browning はそれを夢みてゐたのである。彼は、人間の完全性といふものを、この世に於て理想としてゐるのではない。人間の限りある力の背後にある何ものかを感知しながら、その中心を人間の魂の中におくのである。

There is an inmost centre in us all,  
Where truth abides in fulness<sup>2</sup>

*Pauline* で、彼は self-conscious な詩人のもつ、一つの避けられない精神内部の対立に直面する。

I am made up of an intensest life,  
Of a most clear idea of consciousness  
Of self, distinct from all its qualities,  
From all affections, passions, feelings, powers;  
And thus far it exists, if tracked, in all:  
But linked, in me, to self-supremacy,  
Existing as a centre to all things,  
Most potent to create and rule and all  
Upon all things to minister to it;  
And to a principle of restlessness  
Which would be all, have, see, know, taste, feel, all—  
This is myself; and I should thus have been

1 Stephen Spender: *The Making of a Poem* (1955), p. 71.

2 *Paracelsus*, I. ll. 744—45.

と述べてゐる。

自我といふものの自覚の上に立って、自己をすべてのものの中心に位する存在とする一方に於て、自分の小さな存在（客観的事実として、世の中から認められてゐた詩人 Shelley を、いつも自分の上においてゐることも含めて）をみとめなければならない。そして、自己といふものを無にも近い存在としてながめた時、彼の唯一の導き星——‘a need, a trust, a yearning after God’——を認識するのである。しかし、この全く矛盾する二つの意識を詩人の自我の中にとり入れることにより、詩人自身の大きな未来への発展が予想されるのである。云い換へれば、自我といふ知的な自覚から、自己を中心にしないで認められた自我を意識することによって得られた或飛躍と云へる。それは、「愛」といふ語によって表はされる。

How should this earth's life prove my only sphere?  
Can I so narrow sense but that in life  
Soul still exceeds it? In their elements  
My love outsoars my reason; but since love  
Perforce receives its object from this earth  
While reason wanders chainless, the few truths  
Caught from its wanderings have sufficed to quell  
Love chained below;<sup>1</sup> (ll. 636—43)

ここで、「自分の理性が愛情を飛躍させる」、と云つてゐるのは、語りかけてゐる詩人の Pauline に対する感情を、表面上は意味するのである。これら数行につづけて、「天使にとりまかれた理性を、とき放たれた愛がしのぐであらうか。いや、自分の感じてゐるのは、凡ての人間的な愛に優るも

1 この箇所は、final revision と初版との間に、用語及び表現の相異が相当あるので、意味の解釈上あげておく。

And thus I know this earth is not my sphere,  
For I cannot so narrow me but that  
I still exceed it: in their elements  
My love would pass my reason; but since here  
Love must receive its objects from this earth  
While reason will be chainless, the few truths  
Caught from its wanderings have sufficed to quell  
All love below;

のであるかもしれない。」とあってゐる。さうすると、ここで云はれる愛とは、いはゆる人間の愛情 (human love) ではない。また、神の愛といふ、純粹に宗教的な「愛」でもなささうである。

Andromeda の象徴的な描寫は、上記の引用のすぐ後につづいてくる。Pauline における人間の赤裸な魂と、Andromeda の裸体の姿、しかも 'alone' な姿である。後期の作品 *Parleyings*<sup>1</sup> (1887) に於ても、よびかけられる象徴である。nude 藝術の弁護として書かれたこの詩には、Pauline で探求された naked soul の必然的な帰着が見られる。丁度、nude 画家が人間の裸体を描くことによって、創造主への榮光をあらはさうとするかの様に。

父親の藏書の中で、Caravaggio による Andromeda と Perseus の版画ほど、少年時代の Browning の心を湧き立たせたものはないと云はれる。あの無垢の犠牲者 (innocent victim) と、聖い救ひの手 (divine deliverer) の物語をあかず耳にし、成人するにつれて、絵画を通して紹介された印象は、彼に深刻な、複雑な感情をはらませたであらう。初期の創作に当り、この版画は始終彼の目前に浮んでゐた、といふことである。<sup>2</sup>

この象徴的なことばで暗示される愛の世界は、藝術の本質としての、subjective なものと objective なものとの調和を意図して、ひき合ひに出された様に思はれる。複雑な感情を、実に淡々とうたつてゐる “Andromeda!” とよびかける数行の中に、“Soul requires another change” (l. 670) とある。これも意味の深い一節である。前にも述べた通り、Pauline に於ては、首尾一貫された構成がなされてゐないため、彼の意図を順を追って探ることは困難と思はれる。しかし、次の作品では、その試みがだんだんと明確に描かれてゆく。

Paracelsus は、歴史上の人物と云はれる十六世紀の自然科学者を取扱つてはゐるものの、やはりこの作品も一種の自叙傳的色彩を帯びてゐる。

<sup>1</sup> cf. *Parleyings with Certain People of Importance*, 'Furini Sermonizes' III.

<sup>2</sup> William Sharp: *Robert Browning*, p. 25.



Paracelsus といふ一個の人間を通して、無限の知識欲を追求してゆくのである。しかし、Faust 的ではない。Aprile といふ不運な愛の詩人を登場させ、併立させることによって、「知」と「愛」といふ二つの対象を融合させ、調和させようとするのである。

ここに於て、self から unself といふ自覚が生じてくる。Faust は、人間の無限性を信じ、無限の知識を探究してゆかうとした。そして、遂には悲劇的結末をもたらした。Paracelsus は、人間の有限性を認め、知識探究を成就させるためには、愛を必要とすることを感じるのである。しかし、作者は、最後の解決をいそがずに、なほ後に残してゐる。

Thus he dwells in all,  
From life's minute beginnings, up at last  
To man—the consummation of this scheme  
Of being, the completion of this sphere  
Of life: (v. ll. 664—68)

死に臨み、彼の言ひ残す告白は、愛によって、人間の無限性を獲得すること、少しでも神に近づき得る唯一のものとして、愛を認めたのである。この予想、解決の暗示を與へる愛とは、決して宗教的な解決を強要するものではない。

勿論、Browning の生ひ立ちから考へてみるなら、宗教的なものは多分に含まれてゐる。ドイツ系の血をひいた母親 Sarah Anna Wiedemann は、熱心なプロテスタント信者である。さういった家庭に、しかも教育も家庭内で修得したのであるから、強い根を下ろした信仰をもつてゐることは、当然と云はなければならない。しかし、彼の詩人としての使命感が、信仰によつての解決を迫り、それを以て、彼の使命を果すやうな事は無かつた。それは、彼の後期の作品についても、一貫した精神として受けとられよう。

むしろ、愛による一つの解決の道しるべとなるのは、自我から発した人間 ego の自覚が、自分の中にある他のものの媒介によつて成しとげられるという意識である。そこで、self-conscious に対する unself-conscious のもつ意味を考へてみる必要がある。

Self の「自我」に対し、unself といふものを、私は「他我」或は「他利的なもの」とは解釈しない。self の主観性に対し、客観性をもつものとしての「我」の意識とみる。‘unself-conscious’ とは、original experience にとっては、重要な要素となり、確かに reality へと近づくことの出来ない人間意識である、<sup>1</sup> といはれる。そしてこれは、imagination の媒介を通してのみ可能なのである。

I would lay bare to you the human heart  
Which God cursed long ago (iv. ll. 149—50)

といふ中には、明かに原罪の意識が含まれてゐるが、原罪の意識も、われわれの original experience であって、これを必ずしも、宗教的意識としてとり上げる必要はないと思ふ。

これを以ても分る様に、彼は、現代人的な自覚の上に立つての解決を暗示してゐる。self-conscious な詩人の心を unself-conscious へと導いていた処に、彼の特異性があるのではなからうか。

Mine is no attempt to build a world  
Apart from his, like those who set themselves  
To find the nature of the spirit they bore,  
And, taught betimes that all their gorgeous dreams  
Were only born to vanish in this life,  
Refused to fit them to its narrow sphere,  
But chose to figure forth another world  
And other frames meet for their vast desires,—  
And all a dream!<sup>2</sup> (I. ll. 808—16)

1 cf. Robert D. Wagner: ‘The Meaning of Eliot’s Rose-Garden’ in *PMLA*, March 1954.

2 これも final revision と初版の間に大きな用語上の相異があるので比べてみる。ll. 808-10 と ll. 815-16 は変化なし。そして l. 813 と l. 814 の間に一行余分に入っている。

And beauteous fancies, hopes, and aspirations,  
Were born only to wither in this life,  
Refused to curb or moderate their longings,  
Or fit them to this narrow sphere, but chose  
To figure and conceive another world

これによっても、初版と最終版とで論点についてのくひ違ひは見られないであらう。

これは、第一幕で Paracelsus が学問探究のため友人 Festus のもとを離れてゆかうとする際、その妻 Michal が思ひとどませ様としたのに対し、決意のほどを滔々と述べる一節である。Pauline で追求されてきた “Soul requires another change” と共に、naked soul の意識内に含まれる重要な theme であらう。

それでは、人間精神内部の必要とされる新しい変革、新生命への確信は、一体何によってもたらされるのであらうか。それは、

So glorious is our nature, so august  
Man's inborn uninstructed impulses—  
His naked spirit so majestic!  
But it was born in me: I was made so. (v. ll. 602-5)

といふ自覚によって、はじめて成就されるのである。人間の primal elements である impulse によってである。そのために、naked soul を究めてゆくことは、避けられなかった。

ここで一つの矛盾が成立する。Browning が Pauline に於て、やや雑然とではあったが、自我の烈しい意識と併行して描いてきた宇宙的人間存在の意識、そして、次に、Paracelsus での中心をなした知識と愛との葛藤が、self と unself によって、互に関連性をもつといふ事である。上記の引用に示される一つの解決への手がかりが、人間の生得的な、意識以前の impulse によってなされる。即ち、primal なものによると考へられる。

E.D.H. Johnson は、Browning に関しての一章に於て、かう云ってゐる。

By his constant advocacy of intuitive over rational knowledge, Browning took over the anti-intellectualism of the Romantics and pushed it in the direction of pure primitivism.<sup>1</sup>

今まで self に対して、unself といふことばで表はしてきたのは、naked soul を説明するために、便宜上用ゐたものであった。けれどもここに、或一つの連想が起ってくる。それは、“It was as primitive, and as un-self-conscious as the wailing of a baby.”<sup>2</sup> といふ、現代の小説家が書いた

1 *The Alien Vision of Victorian Poetry* (1952), p. 92.

2 P.H. Newby: *A Journey to the Interior* (1945 Guild Book), p. 181.

比喩的な一節である。自我といふものを超越した、自我のない意識、それは、self から発したものでなく、相反する故に、同等の存在となる矛盾した関係にあり、しかも、同時に存在するのである。その意味では、impulse に対応するものとしては、will が用ゐらるべきであらう。

*Paracelsus* では、二人物を通して、self=knowledge (*Paracelsus*), unself=love (*Aprile*) を対立させ、問題解決への暗示を試みた。

次に、impulse に対する will が残されてゐるが、この問題への試みは、初期の作品といはれる中での、最後を占める *Sordello* で中心となるのである。

しかし、その前に少し、付け加へておきたい。*Paracelsus* と *Sordello* 出版の間には、五年といふ年月が経過してゐる。その間に、悲劇 *Strafford* が 1837 年、五月一日に Covent Garden に於て上演された。この悲劇は、*Paracelsus* 出版の直後、彼の詩人の才能と、その迫力に動かされた William Macready といふ俳優が、舞台上演する劇作を彼にすすめたために書かれたのであった。一時的な成功をおさめた様に見えたものの、やはり失敗作であった。出版された時の序文の中で、彼は ‘Character in Action’ の劇よりは、むしろ ‘Action in Character’ の劇を復活させたいといふ事をもらしてゐる。しかし、彼の劇作は、上演には不向きであることを、当時の多くの批評家たちも指摘してゐるし、やはり依然として、試作的なものとなった。

しかし、この一種の政治悲劇に於ても、彼は未来への希望を暗示することを忘れない。

Child, care not for the past, so indistinct,  
Obscure—there's nothing to forgive in it,  
'T is so forgotten! From this day begins  
A new life, (iv. ii. ll. 122—25)

*Sordello* も歴史上の人物を素材としてゐる。1838 年四月から七月までの最初のイタリヤ旅行では、*Sordello* に関する史料をくまなく調べて帰っ

たのであった。Paracelsus が科学者であったのに対し、彼は十二世紀に生れたイタリヤ貴族の子である。恵まれた環境にあって、詩を書いたり、戦場にのぞんだりして、この作品もやはり、この一人の人物 Sordello の魂の発展 (the development of a soul) を追究してゆく。純粹に一個の人物の心的作用 (imagination)、云ひ換へれば will の力によって、生命を得ることを目的としてゐるのである。

はじめ、人間の肉体を ‘Machine for Acting Will’ と考へた Sordello は、成人するにつれて、心の内部の働きも、長足の進歩をとげる。そして、眞の詩人とは、彼らが成すところのものを、完成させることが可能であり、自分の超自然力は意志であると感じる。彼にとって、人間の生命とは意志の力によって存在し (exist)、感知する (perceive) のである。そのままの姿で「ただ在る」のではなく、在る前には一つの世界の中に含まれてゐる自分でなければならないことを認識する。

Whereas I must, ere I begin to Be,  
Include a world, in flesh, I comprehend  
In spirit now; (III. ll. 174—76)

即ち、充たされた自己を生きること、であつて、單に生きてゐる経験のみが、自己といふものを完全にするのである。自己が在る、といふことは人間の意志ではない。これは、云ひ換へるなら自己内部における客観意識ではなからうか。

Already you include  
The multitude; then let the multitude  
Include yourself; and the result were new:  
Themselves before, the multitude turn you.  
This were to live and move and have, in them,  
Your being, and secure a diadem  
You should transmit (because no cycle yearns  
Beyond itself, but itself returns) (v. ll. 538—45)

Sordello は今まで自己を中心に、すべてを一身に包括し、彼自身に内在する意志の力によって行動して來たのであった。しかし、今や彼は自分の外界——他——に含まれることによって、自己の中に、他の意識が併存

することになる。しかし、Sordello は最後まで、同様の問をくり返し、遂にそれを把握せずに終る。

in their soul,  
The Whole they seek by Parts—but, found that Whole,  
Could they revert, enjoy past gains? The space  
Of time you judge so meagre to embrace  
The Parts were more than plenty, once attained  
The Whole, to quite exhaust it; (v. ll. 286—91)

結末は儚ない。あくまでも to live を to be より強調して、二つの対立 to know と to love を完全に融合されないままにして残してゐる。即ち、自己内部の力を重視して、‘external power’ を認めさせずに、この monologue を終らせた。前の作品に於ては、二人の人物を登場させることにより、この難問への解決の糸口を示すことは比較的容易であつたらう。しかし、この作品では、一人の人間のみが、大うつしに描かれ、その精神内部を扱ふのであるから、さうたやすくは結末の與へられよう筈がない。

Browning は、初期の作品に於て、以上のべてきた二つのものの対立を、一つの課題として掲げながら、以後の詩の展開を、われわれに予想させるのである。

---

Texts: *Robert Browning's Poetical Works*, 16 vols., London, Smith Elder & Co., 1889.

*The Poetic and Dramatic Works of Robert Browning*, 6 vols., Boston, Houghton Mifflin & Co., 1887.

*Browning: Poetry and Prose* select. by Simon Nowell-Smith.  
London, Rupert Hart-Davis, 1950.

*New Letters of Robert Browning* edit. by DeVane & Knickerbocker.  
London, John Murray, 1951.

*Dearest Isa: Robert Browning's Letters to Isabella Blagden* edit. by Edward C. McAleer. London, John Murray, 1951.